

# 「深簷胡帽」考

## ――蒙元とその後の時代における女真族帽子の盛衰史

張佳佳 （復旦大学文史研究院）

### 発表要旨：

---

明太祖の洪武元年に発した「胡服」を改める詔令には、元の時代に流行っていた「深簷胡帽」も対象となっていた。蒙元時代の資料を総合的に考察すれば、鮮明な時代的特徴を持つ「深簷胡帽」は即ち「幔笠」のことだと判明する。「幔笠」はそもそも金の女真族の服飾であったが、後にモンゴル人に受け入れられ、さらに蒙古の遠征とともに中国、高麗、中央アジアないしペルシアにまで広がった。君主から大臣官僚、知識人、庶民に至るまで各階層で広く着用されていた。元明交代以後、「深簷胡帽」が漢民族の士大夫たちに、元の時代に中国がいかに胡化されたかの重要な象徴だとされ、たちまち歴史の舞台から退いた。朝鮮半島においても、高麗から朝鮮王朝への交代の際に似たようなことがあった。

「幔笠」は鮮明な時代的特徴を備えているが、これまでの蒙元服飾研究においては正確に理解されておらず、明の帽子との混同も見られた。「幔笠」に関する研究は、重要な図像資料の生成時代を明らかにすることができる。また、東アジアにおける「幔笠」の流行と消失は、かつて一世を風靡した「蒙古スタイル」の盛衰や、東アジア儒者知識人の「胡漢・華夷」思想の消長の歴史の一側面を物語っているといえよう。

### 略歴

---

1981年、山東省高密生まれ。北京大学中文系古典文献学学士（2004）、清華大学歴史系歴史文献学修士（2007）、復旦大学歴史系専門史博士（2011）、現在は復旦大学文史研究院副研究員。専門分野は元明の社会文化史。著作は『新天下之化：明初礼俗改革研究』（復旦大学出版社、2014年）；論文は『元済寧路景教世家考論』、『再叙彝伦：洪武時期的婚喪礼俗改革』、『別華夷與正名分：明初的日常雜礼規範』、『衣冠與認同：麗末鮮初朝鮮半島襲用「大明衣冠」历程初探』、『明初的漢族元遺民』等十数編。